

開扉一妖帖

泉鏡花

青空文庫

ただ仰向けに倒れなかったばかりだったそうである、松村信也氏——こう真面目に名のつたのでは、この話の模様だと、御当人少々極りが悪いかも知れない。信也氏は東——新聞、学芸部の記者である。

何しろ……胸さきの苦しさに、ほとんど前後を忘れたが、あとで注意すると、環海ビルジング——帯暗白堊、五階建の、ちようど、昇つて三階目、空に聳えた滑かに巨大なる巖を、みしと切組んだようで、芬と湿りを帯びた階段を、その上へなお攀上ろうとする廊下であった。いうまでもないが、このビルジングを、礎から貫いた階子の、さながら只中に當つていた。

浅草寺観世音の仁王門、芝の三門など、あの真中を正面に切つて通ると、怪異がある、魔が魅すと、言伝える。偶然だけれども、信也氏の場合は、重ねていうが、ビルジングの中心にぶつかった。

また、それでなければ、行路病者のごとく、こんな壁際に踞みもしまい。……動悸に波を打たし、ぐたりと手をつきそうになった時は、二河白道のそれではないが——石段は

幻に白く浮いた、まんじ卍の馬の、かたあぶみ片鐙をはずして倒に落ちそうにさえ思われた。

いや、どうもちつと大袈裟だ。おおげさ信也氏が作者に話したのを直接に聞いた時は、そんなにも思わなかった。が、ここに書きとると何だか誇張したもののよう、に聞こえてよくない。

もつとも読者諸賢に対して、作者は謹んで真面目である。処を、信也氏は実は酔っていた。

宵から、銀座裏の、腰掛ではあるが、きなだ生灘をはかる、料理が安くて、庖丁の利く、小皿盛の店で、十二三人、気の置けない会合があつて、狭い卓子テエブルを囲んだから、端から端へ杯が歌留多かるたのようにはずむにつけ、店の亭主が向顱むこうはちまき巻で気競うから菊正宗の酔えいが一層烈しい。

——松村さん、木戸まで急用——

いけ年としつかまつを仕つた、学芸記者が馴なれない軽口の逃口にげ上で、帽子を引浚ひつさらうと、すつとは出られぬ、ぎつしり詰合つて飲んでいる、めいめいが席を開き、座を立てて退口のきぐちを譲つて通した。——「さ、出よう、遅い遅い。」悪くすると、同伴つれに催促されるまで酔潰よいつぶれかねないのが、うろ抜けになつて出たのである。どうかしてるぜ、憑つきものがしたようだ、怪け我がをしはしないか、と深切なのは、うしろを通して立ったまま見送つたそうである。

が、開き直つて、今晚は、環海ビルジングにおいて、そんじよその辺の芸妓連中げいしや、音

曲のおさらいこれあり、頼まりました義理かたがた、ちよいと顔を見に参らねばなりませぬ。思切つて、ペロ兀はげの爺じいさんが、肥ふとった若い妓こにしなだれたのか、浅葱あさぎの襟をしめつけて、雪駄せうたをちやらつかせた若いものでないと、この口上は——しかも会費こそは安い、が、いずれも一家をなし、一芸に、携わる連中に——面と向つては言いかねる、こんな時に持出す親はなし、やけに女房が産氣づいたと言えないこともないものを、臨機縦横の氣働きのない学芸だから、中座の申訳に困り、熱爛あつかんに舌をやきつつ、飲む酒も、ぐっぐと咽喉のどへ支えつかしていたのが、いちどきに、赫かつとなつて、その横路地から、七彩の電燈の火山のごとき銀座の木戸口へ飛出した。

たちまち群集の波に捲まかれると、大橋の橋杭はしぐいに打衝ぶつつかするような円タクに、

「——環海ビルジング」

「——もう、ここかい——いや、御苦労でした——」

おやおや、会場は近かつた。土橋どはし寄りだ、と思うが、あの華やかな銀座の裏を返して、黒幕を落したように、バツタリ寂しい。……大きな建物ばかり、四方に聳しやうりつ立した中にこの灰白ほのしろいのが、四角に暗夜やみを抽ぬいた、どの窓にも光は見えず、霽もやの曇りで陰々として

いる。——場所に間違いはなからう——大温習会、日本橋連中、と門柱に立掛けた、字の
ほかは真^{まつしろ}白な立看板を、白い電燈で照らしたのが、清く涼しいけれども、もの寂しい。
四月の末だというのに、湿^{しつき}気を含んだ夜風が、さらさらと辻^{つじ}惑^{まど}いに吹迷って、卯の花を
乱すばかり、颯^{さつ}と、その看板の面^{おもて}を渡った。

扉を押すと、反動でドンと閉ったあとは、もの音もしない。正面に、エレベエタアの鉄
筋が……それも、いま思うと、灰色の魔^まの諸^{もろ}脚^{あし}の真^ま黒な筋のごとく、二ヶ処に洞^{ほら}穴^{あな}
をふんで、冷く、不気味に突^つ立^たつていたのである。

——まさか、そんな事はあるまい、まだ十時だ——

が、こうした事に、もの馴^なれない、学芸部の了^{りよう}簡^{けん}では、会場にさし向う、すぐ目前^{まへ}、
紅提灯^{べにちょうちん}に景幕か、時節がら、藤、つつじ。百合、撫子^{なでしこ}などの造花に、碧^{あおむらさき}紫の
電燈^{でんせん}が燦^{さん}然^{ぜん}と輝いて——いらつしやい——受附^{うでば}でも出張^でっている事、と心得違^{こころあ}いをして
いたので。

どうやら、これだと、見た処、会が済んだあとのように思われる。

——まさか、十時、まだ五分钟前だ——

立っていても、エレベエタアは水に沈んだよう動くとも見えないから、とにかく、左

へ石梯子いしばしどを昇りはじめた。元來慌てもののせつかちの癖に、かねて心臓が弱くて、もの一町と駆出すことが出来ない。かつて、彼の叔父に、ある芸人があつたが、六十七歳にして、若いものと一所に四国に遊んで、負けない気で、鉄柵てつかいヶ峰へ押昇つて、煩つて、どつと寝た。

聞いてさえ恐れをなすのに——ここも一種の鉄柵ヶ峰である。あまつさえ、目に爽さわかな、敷波の松、白妙しろたえの渚なぎさどころか、一毛の青いものさえない。……草も木も影もない。まだ、それでも、一階、二階、はッはッ肩で息ながら上るうちには、芝居の棧敷裏さじきうらを折曲まがげて、縦つたに突立てたように——芸妓げいしやの温習おさらいに見れば、——客うちの中なり、楽屋うちなり、裾模様すそもようを着けた草、櫛くしさした木の葉の二枚三枚は、廊下へちらちらとこぼれて来よう。心だのみの、それが仇あだで、人けがなさ過ぎると、虫も這はわぬ。

心は轟とどろく、脉みやくは鳴る、酒の酔えいを円タクに蒸まわられて、汗ばんだのを、車を下りてから一度夜風にあたつた。息もつかず、もうもうと四面の壁の息においを吸つて昇るのが草いきれに包まれながら、性の知れない、魔ものの胴中どうなかを、くり抜きに、うろついている心地がするの、たださえ心臓の苦しいのが、悪酔はきけに嘔氣みもだがついた。身悶みもだえをすれば吐つきそうだから、引返ひっかえして階下したへ抜けるのさえむずかしい。

突俯して、（ただ仰向けに倒れないばかり）であつた——

で、背くぐみに両膝を抱いて、動悸を圧え、潰された蜘蛛のごとくビルジングの壁際に踞んだ処は、やすものの、探偵小説の挿画に似て、われながら、浅ましく、情ない。

「南無、身延様——三百六十三段。南無身延様、三百六十四段、南無身延様、三百六十五段……」

もう一息で、頂上の境内という処だから、団扇太鼓もだらりと下げて、音も立てず、千箇寺参りの五十男が、口で石段の数取りをしながら、顔色も青く喘ぎ喘ぎ上るのを——下山の間際に視たことがある。

思出す、あの……五十段ずつ七折ばかり、繋いで掛け、雲の棧に似た石段を——麓の旅籠屋で、かき玉の椀に、きざみ昆布のつくだ煮か、それはいい、あろう事か、朝酒を煽りつけた勢で、通しの夜汽車で、疲れたのを顧みず——時も八月、極暑に、矢声を掛けて駆け昇った事がある。……

呼吸が切れ、目が眩むと、あたかも三つ目と想う段の継目の、わずかに身を容るるばかりの石の上へ仰ぎ倒れた。胸は上の段、およそ百ばかりに高く波を打ち、足は下の段、お

よそ百ばかりに震えて重い。いまにも胴中から裂けそうで、串戯どころか、その時は、合掌に胸を緊めて、真蒼になつて、日盛の蚯蚓でのびた。叔父の鉄柺ヶ峰ではない。身延山の石段の真中で目を瞑ろうとしたのである。

上へも、下へも、身動きが出来ない。一滴の露、水がなかった。

酒さえのまねば、そうもなるまい。故郷も家も、くるくると玉に廻つて、生命の数珠が切れそうだった。が、三十分ばかり、静としていて辛うじて起つた。——もつともその折は同伴があつて、力をつけ、介抱した。手を取つて助けるのに、縋つて這うばかりにして、辛うじて頂上へ辿ることが出来た。立ち処に、無熱池の水は、白き蓮華となつて、水盤にふき溢れた。

——ああ、一口、水がほしい——

実際、信也氏は、身延山の石段で倒れたと同じ気がした、と云うのである。

何より心細いのは、つれがない。樹の影、草の影もない。噛みたいほどの雨気を帯びた辻の風も、そよとも通わぬ。

……その冷く快かつた入口の、立看板の白く冴えて寂しいのも、再び見る、露に濡れた一叢の卯の花の水の葉ををすると思うのも、いまは谷底のように遠く、深い。ここに、突

当りに切組んで、二段ばかり目に映る階段を望んで次第に上層を思うと、峰のごとく遙^{はるか}に高い。

気が違わぬから、声を出して人は呼ばれず、たすけを、人を、水をあこがれ求むる、瞳ばかり睜^{みは}つたが、すぐ、それさえも茫^{ぼう}となる。

その目に、ひらりと影が見えた。真向うに、矗^{ちくりつ}立した壁面と、相接するその階段へ、上から、黒く落ちて、鳥影のように映った。が、羽音はしないで、すぐその影に薄^{うす}りと色が染まつて、婦^{おんな}の裾^{すそ}になり、白い蝙蝠^{こうもり}ほどの足袋が出て、踏んだ草履の緒が青い。

翼^{あいのねずみ}に藍^{あいな}鼠^{ねずみ}の縞^{しま}がある。大柄なこの怪しい鳥は、円^{まるまげ}鬚^げが黒かった。

目鼻立ちのばらりとした、額のやや広く、鼻の隆^{たか}いのが、……段の上からと、廊下からと、二ヶ処の電燈のせい、その怪しい影を、やっぱり諸翼^{もろは}のごとく、両方の壁に映しながら、ふらりと来て、朦朧^{もうろう}と映ったが、近づく、こっちの息だか婦^{おんな}の肌^{かわ}の香^かだか、芬^{ぶん}々^{ぶん}とおつて酒臭い。

「酔つてますね、ほほほ。」

蓮葉^{はすは}に笑った、婦^{おんな}の方から。——これが挨拶^{あいさつ}らしい。が、私が酔っています、か、お前さんは酔つてゐるね、だか分らない。

「やあ。」

と、渡りに船の譬喩たとえも恥かしい。水に縁の切れた糸瓜へちまが、物干の如露じよろへ伸上るように身を起して、

「——御連中ですか、お師匠……」

と言った。

薄手のお太鼓だけれども、今時珍らしい黒縹くろひめす子豆絞りの帯が弛ゆるんで、一枚小袖もずりとした、はだかつた胸もとを、きちりと紫の結むすびめ目で、西行法師——いや、大宅光おおやけみつ国くにという背負しよいかた方をして、櫓かしであろう、手馴てなれて研ぎのかかった白木の細い……所作、稽古けいこの棒についている。とりなりの乱れた容子ようすが、長刀ながなたに使ったか、太刀か、刀か、舞台で立廻りをして、引込ひっこんで来たもののように見えた。

ところが、目皺めじわを寄せ、頬を刻んで、妙に眩まぶしそうな顔をして、

「おや、師匠とおいでなすったね、おとぼけでないよ。」

とのつけから、

「ちよいと旦那だんな、この敷石の道の工合ぐあいは、河岸じゃありませんね、五十間。しゃつぽの旦那は、金やろかいじゃあない……何だつけ……銭ぜにとるめんでしよう、その口から、お師匠

さん、あれ、恥かしい。」

と片袖をわざと顔にあてて俯向いた、襟が白い、が白粉まだらで。……

「……風体を、ごらんなさいよ。パイと吹けば瞽女さあね。」

と仰向けに目をぐつと瞑り、口をひよつとこにゆがませると、所作の棒を杖にして、コトコトと床を鳴らし、めくら反りに胸を反らした。

「按摩かみしも三百もん——ひけ過ぎだよ。あいあい。」

あつと呆氣に取られていると、

「鉄棒の音に目をさまし、」

じやらんとついて、ぱつちりと目を開いた。が、わが信也氏を熟と見ると、

「おや、先生じゃありませんか、まあ、先生。」

「……………」

「それ……と、たしか松村さん。」

心当りはまるでない。

「松村です、松村は確かだけれど、あやふやな男ですがね、弱りました、弱ったとも弱りましたよ。いや、何とも。」

上脊があるから、下にしゃがんだ男を、覗くように傾いて、

「どうなさいました、まあ。」

「何の事はありません。」

鉄柵ヶ峰では分るまい……

「身延山の石段で、行倒れになったようなんです。口も利けない始末ですがね、場所はどこです、どこにあります、あと何階あります、場所は、おさらいの会場は。」

「おさらい……おさらいなんかありませんわ。」

「ええ。」

ビルジングの三階から、ほうり出されたようである。

「しかし、師匠は。」

「あれさ、それだけはよして頂戴よ。ししう……もようもない、ほほほ。こりや、これ、かみがたの口合くちあいや。」

と手の甲で唇をたたきながら、

「場末の……いまの、ルンならいいけど、足の生えた、ぱんぺんさ。先生、それも、お前さん、いささかどうでしょう、ふんと来た処をふり売りの途中、下の辻で、木戸かしら、

入口の看板を見ましてね、あれさ、お前さん、ご存じだ……」

という。が、お前さんにはいいよ分らぬ。

「鶏卵と、玉子と、字にかくとおんなじというめくらだけれど、おさらいの看板ぐらいは形でわかりますからね、叱られやしないと多寡たかをくくって、ふらふらと入って来ましたがね。おさらいや、おおさえや、そんなものは三番叟さんばそうだって、どこにも、やってやしませんのさ。」

「はあ。」

とばかり。

「お前さんも、おさらいにおいでなすったという処で見ると、満ざら、私も間違えたんじやありませんね。ことによったら、もう刎はねつちまったんじやありませんか。」

さあ……

「成程、で、その連中でないとすると、弱ったなあ。……失礼だが、まるつきりお見それ申したがね。」

「ええ、ええ、ごもつとも、お目に掛かったのは震災ずっと前でござんすもの。こつちは、商売、慾張よくばってますから、両三度だけれど覚えていますわ。お分りにならない筈はず……」

と無雑作な中腰で、廊下に、斜ななめに向合つた。

「吉原の小浜屋（引手茶屋）が、焼出されたあと、仲なかのちよう之町をよして、浜はまちよう町で鳥料理をはじめました。それさ、お前さん、鶏卵と、玉子と同類の頃なんだよ。京千代さんの、鶇とぎさんと、一座で、お前さんおいでなすつた……」

「ああ、そう……」

夢のように思出した。つれだつたという……京千代のお京さんは、もとその小浜屋に芸げ妓いしやの娘分が三人あつた、一番の年若で。もうその時分は、鶇とぎの細君であつた。鶇氏——画名は遠慮しよう、実の名は淳じゆんのすけ之助である。

（——つい、今しがた銀座で一所に飲んでいた——）

この場合、うつかり口へ出そうなのを、ふと控えたのは、この婦おんなが、見た処の容子だと、銀座へ押掛けようと言いかねまい。……

その腰掛では、現に、ならんで隣合つた。画会では權威だと聞く、厳いかめしい審査員でありながら、厚ぼつたくなく、もの柔やわらかにすらりとしたのが、小井のもずくの傍わきで、海を飛出し、銀に光る、鰹かつおの皮づくりで、静しずかに猪口ちよくを傾けながら、

「おや、もう帰る。」信也氏が早急に席を出た時、つまの蓼たでを真青まつさおに嚙かんで立つたのが

その画伯であつた。

「ああ、やっと、思出した……おつまさん。」

「市場の、さしみの……」

と莞爾^{にっこり}する。

「おさらいは構わないが、さ、さしあたって、水の算段はあるまいか、一口でもいいんだが。」

「おひや。暑そうね、お前さん、真赤^{まっか}になつて。」

と、扇子^{おうぎ}を抜いて、風をくれつつ、

「私も暑い。赤いでしょう。」

「しんは青くなっているんだよ……息が切れて倒れそうだね。」

「おひや、ありますよ。」

「有りますか。」

「もう、二階ばかり上の高い処に、海老屋^{えびや}の屋根の天水桶^{おけ}の雪の遠見つてのがありました。」

「聞いても飛上りたいが、お妻さん、動悸が激しくつて、動くど嘔きそうだ。下へもおりられないんだよ。恩に被るから、何とか一杯。」

「おつしやるな。すぐに算段をしますから。まったく、いやに蒸すことね。その癖、乾き切つてき。」

とついと立つて、

「五月雨の……と心持でも濡れましょう。池の菰に水まして、いずれが、あやめ杜若、さだかにそれと、よし原に、ほど遠からぬ水神へ……」

扇子をつかつて、トントンと向うの段を、天井の巢へ、鳥のようにひらりと行く。

一あめ、さつと聞くおもい、なりも、ふりも、うつちやった容子の中に、争われぬ手練が見えて、こつちは、吻と息を吐いた。……

——踊が上手い、声もよし、三味線はおもて芸、下方も、笛まで出来る。しかるに芸人の自覚といった事が少しもない。顔だちも目についたが、色つぽく見えない処へ、媚しさなどは気もなかった。その頃、銀座さんと称うる化粧問屋の大尽があつて、新に、「仙牡丹」という白粉を製し、これが大当りに当たった、祝と披露を、枕橋の八百松で催した事がある。

裾すそを曳ひいて帳場たちいに起居あだの女房あだの、婀娜あだにたおやかなのがそっくりで、半四郎茶屋と呼ばれた引手茶屋ひいしやの、大尽まっさきは常客まっさきだった、芸妓げいしやは小浜屋きょうだいの姉妹きょうだいが一ひいの鼻肩ひいだったから、その祝宴まつさきにも真先まっさきに取持まつさきった。……当日しこうは伺候しこうの芸者大勢ししがいずれも売出しなぞちの白粉なぞちの銘なぞち仙牡丹ちなに因ちなんだ趣向まかりいをした。幫間ほうかんなかまは、大尽客まかりいを、獅子ししに擬え、黒牡丹なぞちと題して、金の角おしけの縫はていぐるみの牛おしけになって、大広間まかりいへ罷出まかりいで、馬まかりいには狐まかりいだから、牛まかりいに狸まかりいが乗った、滑稽おしけの果はては、縫はてぐるみを崩おしけすと、幫間ほうかん同士まかりいが血まかりいのしたたるビフテキまかりいを捧まかりいげて出た、獅子ししの口おしけへ、身を牲にえにして奉にえった、という生命いのちを賭とした、奉仕サアビスである。

(——同町内すまいというではないが、信也氏すまいは、住居すまいも近所すまいで、鵜画伯すまいとは別懇すまいだから、時々その細君すまいの京千代すまいに、茶の間で煙草話すまいに聞すまいいている——)

小浜屋すまいの芸妓姉妹すまいは、その祝宴まつさきの八百松まつで、その京千代まつと、——中の姉たまのお民たま——(こ
れは仲之町こまたを圧こまたして売れた、)——小股こまたの切れた、色白こまたなのが居て、二人で、囃子はやしを揃はやしえ
て、すなわち連獅子れんししに骨身れんししを絞れんししったというのに——上の姉たまのこのお妻たまはどうだろう。興たけなわ酣たけなわ
なる汐時しおどき、まのよろしからざる処しおどきへ、田舎かかあの媽かかあ々の肩手かたてぬぐい拭かたてぬぐいで、引端ひつばし折ひつばしりの蕎麦そばきり
色くさかりかこ、草刈籠くさかりかこのきりだめから、へぎ盆へぎに取へぎつて、上客あるからずらりと席順あるに配あるつて歩行あるいて、

「くいなせえましょう。」と野良声を出したのを、何だとまあ思います？

（——鶴の細君京千代のお京さんの茶の間話に聞いたのだが——）

つぶし餡あんの牡丹餅ぼたんもちさ。ために、浅からざる御不興こうむを蒙った、そうだろう。新製売出しの当り祝につぶしは不可いけない。のみならず、酒宴の半ばへ牡丹餅は可笑おかしい。が、すねたのも、諷ふうしたのでも何でもない、かのおんなの性格の自然に出でた趣向であつた。

……ここに、信也氏のために、きつけの水を汲くむべく、屋根の雪の天水桶を志して、環海ビルジングを上りつつある、つぶし餡のお妻が、さてもその後、黄粉ごまか、胡麻ごまか、いろいろが出来て、日光へ駆落ちした。およそ、獅子大じんに牡丹餅をくわせた姉さんなるもの、生いき死しのあい手を考いえて御覧なさい。相撲か、役者か、渡世人か、いきな処で、こはだの鮓すしは、もう居ない。捻ひねった処で、かりん糖売か、皆違ちがう。こちの人は、京町の交番に新任のお巡査まわりさん——もつとも、角海老かどえびとかのお職が命まで打込んで、上あがり藤の金紋のついた手車で、楽屋入をさせたという、新派の立女形たておやま、二枚目を兼ねた藤沢浅次郎に、よく肖にっていたのだそうである。

あいびきには無理が出来る。いかんせん世の習である。いずれは身のつまりで、遁^にげて心中の覚悟だった、が、華嚴^{けごん}の滝へ飛込んだり、並木の杉でぶら下ろうなどというのではない。女形^{おやま}、二枚目に似たりといえども、彰義隊^{しょうぎたい}の落武者を父にして旗本の血の流れ^そ涼^{うそう}々たる巡査である。御先祖の霊前に近く、覚悟はよいか、嬉しゅうござんす、お妻の胸元を刺貫き——洋刀^{サアベル}か——はてな、そこまでは聞いておかない——返す刀で、峨々^{がが}たる巖石^{いわお そびら}を背に、十文字の立ち腹を搔切^{かつき}つて、大蘇芳年^{たいそよしとし}の筆の冴^{さえ}を見よ、描く処の錦絵^{にしきえ}のごとく、黒髪山の山裾に血を流そうとしたのであった。が、仏法僧のなく音覚^{ねおぼつか}束なし、誰に助けらるるともなく、生命^{いのち}生きて、浮世のうらを、古河銅山の書記^{かきやく}になって、二年ばかり、子まで出来たが、気の毒にも、山小屋、飯場のパパは、煩^{わづら}ってなくなった。お妻は石炭屑^{くず}で黒くなり、枝炭のごとく、煤^{すす}けた姑獲鳥^{うぶめ}のありさまで、おはぐろ溝^{どぼ}の暗^{やみ}夜^みに立ち、刎^{はねばし}橋^{はし}をしよんぼりと、嬰兒^{あかんぼ}を抱いて小浜屋へ立帰る。……と、場所がよくない、そこらの口の悪いのが、日光がえりを、美術の淵源地^{えんげんち}、莊嚴^{ずし}の廚子^{ようし}から影^{ようこう}向した、女菩薩^{によぼさつ}とは心得ず、ただ雷の本場と心得、ごろごろさん、ごろさんと、以来かのおんなを渾名^{あだな}した。——嬰兒が、二つ三つ、片口をきくようになると、可哀相^{かわいそう}に、いつどこで覚えたか、ママを呼んで、ごよごちゃん、ごよちやま。

じつげつせいちゆうやのおりわけ
○日月星昼夜織分——

ごろからの夫婦喧嘩に、なぜ、かかさんをぶたしやんす、もうかんにんと、ごよごよごよ、と雷の児が泣いて留める、件の浄瑠璃だけは、一生の断ちものだ、と眉にも頬にも皺を寄せたが、のぞめば段もの端唄といわず、前垂掛けで、ほがらか朗に、またしめやかに、唄って聞かせるお妻なのであった。

前垂掛——そう、髪もいぼじり巻同然で、紺の筒袖で台所を手伝いながら——そう、

すなわち前に言った、浜町の鳥料理の頃、鶴氏に誘われて四五度出掛けた。お妻が、わが信也氏を知ったというはそこなのである。が、とりなりも右の通りで、ばあや、同様、と遠慮をするのを、鶴画伯に取っては、外戚の姉だから、座敷へ招じて盃をかわし、大分いけて、ほろりと酔うと、誘えば唄いもし、促せば、立って踊った。家元がどうの、流儀がどうの、合方の調子が、あのの、ものの、と七面倒に気取りはしない。口三味線で間にあって、そのまま動けば、筒袖も振袖で、かついだ割箸が、柳にしない、花に咲き、さす手の影は、じきそこの隅田の雲に、時鳥がないたのである。

それでは、おなじに、吉原を焼出されて、一所に浜町へ落汐か、というと、そうでない。ママ、ごよごよは出たり引いたり、ぐれたり、飲んだり、八方流転の、そして、その

頃はまた落込みようが深くつて、しばらく行方が知れなかった。ほども遠い、……奥沢のくほんぶつ、廊の講中がおまいりをしたのが、あの辺の露店の、ぼろ市で、着たのはくたびれた浴衣だが、白地の手拭を吉原かぶりで、色の浅黒い、すつきり鼻の隆いのが、しゅらうながぎせる、かたえくぼ、たばこ、朱羅宇の長煙草で、片、罨に煙草を吹かしながら田舎の媽々と、引解ものの価の掛引をしていたのを覗いたと言う……その直後である……浜町の鳥料理。

お妻が……言つた通り、気軽に唄いもし、踊りもしたのに、一夜、近所から時借りの、三味線の、爪弾で……

丑みの、鐘もおとなき古寺に、ばけものどしがあつまりア……
——おや、聞き馴れぬ、と思う、うたの続きが糸に紛れた。——

きりようも、いろも、雪おんな……

ずどんと鳴つて、壁が揺れた。雪見を喜ぶ都会人でも、あの屋根を這る、軒しずれの雪の音は、凄じいのを知つて驚く……春の雨だが、ざんざ降りの、夜ふけの忍駒だった

から、かぶさった雪の、その落ちる、雪のその音か、と吃驚びつくりしたが、隣の間から、小浜屋の主婦おかみが襖ふすまをドシンと打ったのが、古家だから、床の壁まで家鳴やなりをするまで響いたのである。

お妻が、糸の切れたように、黙った。そうしてうつむいた。

「――魔まが魅さすといひますから――」

一番とり鶏どりであろう……鶏とりの聲が聞こえて、ぞつとした。――引手茶屋がはじめた鳥屋でない、深更よふけに聞く、鶏の聲の嬉しいものでないことに、読者のお察しは、どうかと思う。

時に、あの唄は、どんな化ものが出るのだろう。鶉う氏も、のちにお京さん――細君に聞いた。と、忘れたと云つて教えなかった。

「――まだ小どもだったんですもの――」

浜町の鳥屋は、すぐ潰つぶれた。小浜屋一家は、世田ヶ谷の奥へ引込ひっこんで、唄どころか、おとずれもなかったのである。

（この話の中へも、関東ビルジングの廊下へも、もうすぐ、お妻が、水を調べて降りて来よう。）

まだ少し石の段の続きがある。

——お妻とお民と京千代と、いずれも養女で、小浜屋の芸妓三人の上に、おおあねえ、すなわち、主婦を、お来といった——（その夜、隣から襖を叩いた人だが、）これに、伊作という弟がある。うまれからの廓ものといえども、見識があつて、役者の下端だの、幫間の真似はしない。書画をたしなみ骨董を捻り、俳諧を友として、内の控えの、千束の寮にかくれ住んだ。……小遣万端いずれも本家持の処、小判小粒で仕送るほどの身上でない。……両親がまだ達者で、爺さん、媼さんがあつた、その媼さんが、刎橋を渡り、露地を抜けて、食べものを運ぶ例で、門へは一廻り面倒だと、裏の垣根から、「伊作、伊作」——店の都合で夜のふける事がある……「伊作、伊作」——いやしくも廓の寮の俳家である。卯の花のたえ間をここに音信するものは、江戸座、雪中庵の社中か、抱一上人の三代目、少くとも蔵前の成美の末葉でもあろうと思うと、違う。……田畝に狐火が灯れた時分である。太郎稻荷の眷属が悪戯をするのが、毎晩のようで、暗い垣から「伊作、伊作」「おい、お祖母さん」くしやんと噓をして消える。「畜生め、またうせた。」これに悩まされたためでもあるまい。夜あそびをはじめて、ぐれだして、使うわ、ねだるわ。勘当ではない自分で追出て、やがて、おかち町辺に、もぐって、かつて女たちの、玉章を、きみは今……などと認めた覚えから、一時、代書人をしていた。が、くらしに足りな

い。なくなれば、しやつぽで、袴はかまで、はた、洋服で、小浜屋の店さして、揚幕ほどではあるまい、かみ手から、ぬつと来る。

（お京さんの茶の間話に聞くのである。）

鶯の細君の弱ったのは、爺さんが、おしきせ何本かで、へべったあと、だるいだるい、うつむけに畳に伸びた蹠あしうらを踏ませられる。……ぴたぴたと行やるうちに、草臥くたびれるから、稽古いこの時になまけるのに、催促をされない稽古棒を持出して、息杖いきづえにつくのだそうで。……これで戻駕籠もどりかごでも思出すか、善玉の櫓かでも使えば殊勝だけれども、疼痛疼痛、「お京何をする。」……はずんで、脊骨……へ飛上る。浅草の玉乗たまのりに夢中だったのだそうである。もつとも、すぺりと円い禿頭はげあたまの、護謨コム、護謨コムとしたのには、少なからず誘惑を感じたものだという。げええ。大なおくび、——これに弱った——可厭いやだなあ、臭い、お爺さん、得えならぬにおい、というのは手製てつくりの塩辛で、この爺さん、彦兵衛さん、むかし料理番の入婿だから、ただ同然で、でつち上る。あげ「友さん腸はらわたをおいて行きねえ。」婆さんの方でない、安達ヶ原の納戸でないから、はらごもりを割さくのでない。松魚かつおだ、鯛いだ。烏賊いかでも構わぬ。生麦なまむぎの鰺あじ、佳品である。

魚友うおともは意気な兄哥あにいで、お来さんが少し思召おぼしめしがあるほどの男だが、鳶とびのように魚の

腹を握つかまねばならない。その腸わたを二升瓶に貯える、生葱なまねぎを刻んで捏こね、七色唐辛子を搔か交きまぜ、搔交きまぜ、片かた擣だすきで練上げた、東海の鯤鯨こんけいをも吸寄すべき、恐るべき、どろどろの膏藥こうやくの、おはぐろ溝どぶへ、黄袋の唾をしたような異味を、べろりべろり、と嘗なめては、ちびりと飲む。塩辛いきれの熟柿じゆくしの口で、「なむ、御先祖でええ」と茶の間で仏壇を拝むが日課だ。お来さんが、通りがかりに、ツイとお位牌いはいをうしろ向けにして行く……とも知らず、とろんこで「御先祖でええ。」どろりと寝て、お京や、蹠あしうらである。時しも、鬱金木綿うこんが薄よごれて、しなびた包、おちへ来て一霜ひとしもくらった、大角豆ささげのようなのを嬉しそうに開けて、一粒々々、根附だ、玉だ、緒々《おじめ》だと、むかしから伝われば、道楽でためた秘蔵の小まものを並べて楽しむ処へ——それ、しも手から、しゃっぽで、袴はかまで、代書代言伊作氏が縁台の端へ跣あらわれるのを見ると、そりや、そりや矢藤さんがおいでになったと、慌あわただしく鬱金木綿を臍へそでかくす……他なし、書画骨董の大方を、野分のごとく、この長男に吹さらわれて、わずかに瘦莢やせぎやの豆ばかりここに残った所以である。矢藤は小浜屋の姓である。これで見ると、廓では、人を敬遠する時、我が子と呼ぶに、名を言わず、姓をもつてするらしい。……

矢藤老人——ああ、年を取った伊作翁は、小浜屋が流転の前後——もともと世功を積んだ苦勞人で、万事じよさいのない処で、将^{しょうぎ}碁は素人の二段の腕を持ち、碁は實際初段うてた。それ等がたよりで、隠居仕事の寮番という処を、時流に乗って、丸の内辺の某^く倶楽部^ぶを預つて暮したが、震災のために、立寄つたその樹の蔭を失つて、のちに古女房と二人京橋三十間堀裏のバラック建^{だて}のアパートの小使、兼番人で佗^{わび}しく住んだ。身辺の寒さ寂しさよ。……霜月末の風の夜^よや……破蒲団^{やぶれぶとん}の置炬燵^{おきごたつ}に、齒の抜けた頤^{あご}を埋め、この奥に目あり霞^{かす}めり。——徒^{いたず}らに鼻^{たか}が隆^{くぼ}く目の窪^{くぼ}んだ処から、まだ娑婆^{しやば}婆^ば氣のある頃は、暖簾^{のれん}にも看板にも（目あり）とかいて、煎餅^{せんべい}を焼いて売りもした。「目あり煎餅」勝負事をするものの禁^{まじない}厭^{いと}になると、一時弘まつたものである。——その目をしよぼしよぼさして、長い顔をその炬燵に据えて、いとせめて親を思出す。千束の寮のやみの夜^よ、おぼろの夜^よ、そぼそぼとふる小雨の夜、狐の声もしみじみと可^{なつかし}懐^{なつかし}い折から、「伊作、伊作」と女の音^ねで、扉^{とほそ}で呼ぶ。

「婆^{おば}さんや、人が来た。」「うう、お爺^{おや}さん」内職^{うちしやく}の、楊枝^{ようじ}を辻占^{つじうら}で巻^まいていた古女房が、怯^{おび}えた顔で——「話に聞いた魔ものではないかのう。」とおっかな吃驚^{びっくり}で扉^とを開けると、やあ、化けて来た。いきなり、けらけらと笑つたのは大柄な女の、くずれた円鬚^{まるまげ}

の大年増、尻尾と下腹は何を巻いてかくしたか、縞小紋の糸が透いて、膝へ紅裏のに
じんだ小袖を、ほとんど素膚に着たのが、馬ふんの燃える夜の陽炎、ふかふかと湯気の
立つ、雁もどきと、蒟蒻の煮込のおでんの皿盛を白く吐く息とともに、ふうと吹き、
四合壇を片手に提げて「ああ敷居が高い、敷居が高い、（鳥居さえ飛ぶ癖に）階子段
で息が切れた。若旦那、お久しゆう。てれかくしと、寒さ凌ぎに夜なしおでんで引掛けて
来たけれど、お寒い。」と穴から渡すように、井をのせるとともに、その炬燵へ、緋の
襦袢むき出しの膝で、のめり込んだのは、絶えて久しい、お妻さん。……

「——わかたなは、あんやたい——」若旦那は、ありがたいか、暖かな、あの屋台か、五
音が乱れ、もう、よいよい染みて呂律が廻らぬ。その癖、若い時から、酒は一滴もいけな
いのが、おでんで濃い茶に浮かれ出した。しよぼしよぼの若旦那。

さて、お妻が、流れも流れ、お落ちも落ちた、奥州青森の裏借屋に、五もくの師匠をし
ていて、二十も年下の、炭屋だか、炭焼だかの息子と出来て、東京へ舞戻り、本所の隅っ
子に長屋で居食いをするうちに、この年齢で、馬鹿々々しい、二人とも、とやについて、
どつと寝た。青森の親元へ沙汰をする、手当薬療、息子の腰が立つと、手が切れた。むか
いに来た親は、善知鳥、うとうと、なきながら子をくわえて飯って行く。片翼になって大

道に倒れた裸の浜猫を、ぼての魚屋が拾ってくれ、いまは三河島辺で、そのぼさら屋の阿お媽つかあだ、と煮こごりの、とけ出したような、みじめな身の上話を茶の伽ときにしながら——よぼよぼの若旦那が——さすがは江戸前でちつともめげない。「五もくの師匠は、かわいそ
うだ。お前は芸は出来るのだ。」「武芸十八般一通り。」と魚屋の阿媽うおだけ、太刀の魚うおほ
ど反そつて云う。「義太夫は」「ようよう久しぶりお出しなね。」と見た処、壁にかかった
のは、蝙蝠こうもり傘がさと箒ほうきばかり。お妻が手拍子、口三味線ざみせん。

若旦那がいい声で、

夢が、浮世か、うき世が夢か、夢ちよう里に住みながら、住めば住むなる世の中
に、よしあしびきの大和路や、壺坂の片ほとり土佐町に、沢市という座頭あり。

……

妻のお里はすこやかに、夫の手助け賃仕事……

とやりはじめ、唄でお山へのぼる時分に、おでん屋へ、酒の継足しに出た、というが、
二人とも炬燵の谷へ落込んで、朝まで寝た。——この挿話に用があるのは、翌朝かえりが
けのお妻の態度である。りりしい眉毛を、とぼけた顔して、

「——少しばかり、若旦那。……あまりといえば、おんぼろで、伺いたくても伺えなし、

伺いたくて堪らないし、損料を借りて来ましたから、肌のものまで。……ちよつと、それにお恥かしいんだけど、電車賃……」

（お京さんから、つい去年の暮の事だといって、久しく中絶えたお妻のうわさを、最近に聞いていた。）

お妻が、段を下りて、廊下へ来た。と、いまの身なりも、損料か、借着らしい。

「さ、お待遠様。」

「難^{ありがた}有^いい。」

「灰皿——灰落らしいわね。……廊下に台のものツて寸法にいかないし、遣^{やりて}手部屋というのがないんだもの、湯呑みの工面がつきやしません。……いえね、いよいよとなれば、私は借着の寸法だけれど、花^{はな}柳^{やなぎ}の手拭^{てぬぐい}の切立てのを持っていますから、ズツぱり平右衛門で、一時^{しの}凌^{しの}ぎと思いましたが、いい塩^{あん}梅^{ばい}にころがつていましたよ。大丈夫、ざあざあ洗って洗いぬいた上、もう私が三杯ばかりお毒見が済んでいますから。ああ、そんなに引^ひかぶって、襟が冷くありませんか、手拭をあげましょう。」

「一滴だってこぼすものかね、ああ助かった。——いや、この上欲しければ、今度は自分

で歩^{ある}行けそうです。——助かった。恩に被^きますよ。」

「とんでもない、でも、まあ、嬉しい。」

「まったく活返った。」

「ではその元気で、上のおさらいへいらつしやるか。そこまで、おともをしてもよござんす。」

「で、演^やつていますかね。三味線の音でも聞こえますか。」

「いいえ。」

「途中で、連中らしいのでも見ませんか。」

「人ツこ一人、……大びけ過ぎより、しんとして薄気味の悪いよう。」

「はてな、間^{まち}違^がではなかるうが、……何しろ、きみは、ちつともその方に引っかかりはないのでしたね。」

「ええ、私は風来ものの大気紛れさ、といううちにも、そうそう。」

中腰の膝へ、両^{りょう}肱^{ひじ}をついた、頬^ほ杖^{おづえ}で。

「じかではなくつても——御別懇の鶴先生の、お京さんの姉分だから、ご存じだろうと思
います……今、芝、明^{あけふ}舟^ね町^{ちやう}で、娘さんと二人で、お弟子を取っています、お師匠さ

ん、……お民さんのね、……まあ、先生方がお聞きなすつては馬鹿々々しいかも知れませんが、……目を据える、生命いのちがけの事がありましてね、その事で、ちよつと、切ツつ、はツつもやりかねないといった勢いきおいで、だらしがないけども、私がさ、この稽古棒（よつかけて壁にあり）を槍やり、鉄棒かなぼうで、相手方あいてへ出向いたんでござんすがね、——入費いりようはお師匠さん持だから、乗込みは、ついその銀座の西裏まで、円タクさ。

——呆あきれもしない、目ざす敵かたきは、喫茶店、カフェーなんだから、めぐり合うも捜すもない、すぐ目め前まえに蹶あられました。ところがさ、商売柄、ぴかぴかきらきらで、廓くわの張店はりみせを硝子張がらすはりの、竜宮づくりで輝かそうていったのが、むかし六郷様の裏門へぶつかつたほど、一棟、真暗まつくらじやありませんか。拍子は抜はけとも、間ま抜はけとも。……お前さん、近所で聞くとね、これが何と……いかに業ぎ体ようていとは申せ、いたし方もこれあるべきを、裸で、小判、……いえさ、銀貨を、何とか、いうかどで……営業おさし留めなんだって。……出がけの意気組が意気組だから、それなり舐かえるのも詰りません。隙ひまはあるし、蕎麦屋そばやでも、鮎屋すしやでも氣に向いたら一口、こんな懷中ふところ合あいも近来めつたにない事だし、ぶらぶら歩いて来ましたところが、——この前さ、お前さん、」

と低いが壁天井に、目を上げつつ、

「角海老に似ていましょう、時計台のあつた頃の、……ちよつと、当世ビルジングの御前様に対して、こういつては相済まないけども。……熟^{じつ}と天頂^{てつぺん}の方を見えていますとね、さあ、……五階かしら、屋の棟に近い窓に、女の姿が見えました。部屋着に、伊達巻といった風で、いい、おいらんだ。……串^{じょうだん}戯^ぎじゃない。今時そんな間違いがあるものか。それとも、おさらいの看板が見えるから、衣裳^{いしょう}をつけた踊子が涼んでいるのかも分らない、入つて見よう。」

「ああ、それで……」

「でござんさあね。さあ、上つても上つても。……私も可厭^{いや}になつてしまひましてね。とんとんと裏階^{うらぼしご}子を駆下りるほど、要害に馴^なれていませんから、うろろう気味で下りて来ると、はじめて、あなた、たつた一人。」

「だれか、人が。」

「それが、あなた、こつちが極^{きま}りの悪いほど、雪のように白い、後姿でもつて、さつきのおいらんを、丸剥^{まるはぎ}にしたようなのが、廊下にぼんやりと、少し遠見に……おや！ おさらいのあとで、お湯に入る……ッてこれが、あまりないことさ。おまけに高尾のうまれ土地だところで、野州塩原の温泉じゃないけども、段々の谷底に風呂場でもあるのかしら。」

ぼんやりと見てる間に、扉だか部屋だかへ消えてしまいましたかね。」

「どこのです。」

「この。」

「ええ。」

「それとも隣室^{となり}だったかしら。何しろ、私も見た時はぼんやりしてさ、だから、下に居なすった、お前さんの姿が、その女が脱いで置いた衣^きものぐらいの場所にありましてね。」
信也氏は思わず内端^{うちわ}に袖を払った。

「見た時は、もつとも、気もぼつとしましたから。今思うと、——ぞっこん、これが、目にしみついていますから、私が背負^{しょ}っている……雪おんな……」

（や、浜町の夜更^{よふけ}の雨に——

……雪おんな……

唄いさして、ふと消えた。……）

「?……雪おんな。」

「ここに背負^{ななめ}っておりますわ。それに実^{ほん}に、見事な絵でござんすわ。」
と、肩に斜^{ななめ}なその紫包を、胸でといった端もきれいに、片手で捧げた肱^{ひじ}に靡^{なび}いて、衣紋^{えもん}も

棲つまも整然きちんとした。

「絵ですか、……誰の絵なんです。」

「あら、御存じない？……あなた、鵜先生のじやありませんか。」

「ええ、鵜君が、いつね、その絵を。」

（いまだ、銀座裏で飲んでいよう、すました顔して、すすくと銚子ちようしの数を並べて。）

「つい近頃だと言いますよ。それも、わけがありましたね、私が今夜、——その酒場へ、槍、鉄棒で押掛けたといいました。やっぱりその事でおかきなすったんだけどね。まあ、お目にかけますわ……お待ちさい。ここは、廊下で、途中だし、下へ出た処で、往來と……ああ、ちよつとこの部屋へ入りましょうか。」

「名札はかかつていないけれど、いいかな。」

「あき店だなさ、お前まへさん、田畝たんぼの葦簾よしず張だ。」

と云った。

「ぬしがあつても、夜の旅じや、休むものに極きまつていますよ。」

「しかし、なかに、どんなものか置いてでもあると、それだとね。」

「御本尊のいらつしやる、堂、祠ほこらへだつて入りましょう。……人間同士、構やしません。」

いえ、そこどころじゃあない、私は野宿をしましてね、変だとも、おかしいとも、何とも言いようのない、ほほほ、男の何を飾った処へ、のたれ込んだ事がありますわ。野中のお堂さ、お前さん。……それから見りや、——おや開かない、鍵が掛かつていますかね、この扉は。」

「無論だろうね。」

「お圧おしてみて下さい。開きませんか？ ああ、そうね、あなたがなすつては御身分がら……お待ちなさいよ、おつな呪まじ禁ないがありますから。」

ふところがみ 懷紙を器用に裂くと、端を捻ひねり、頭を抓つまんで、

「てるてる坊さん、ほほほ。」

すぼけた小鰯こたしが、扉の鍵穴に、指で踊った。

「いけないね、坊さん一人じゃ足りないかね。そら、もう一人、出ました。また一人、もう一人。これじゃ長屋の井戸替だ。あかないかね。そんな筈はないんだけれど、——雨をお天気にする力があるなら、掛けた鍵なぞわけなしじゃあないか。しっかりおしよ。」

ぽんと、丸めた紙の頭を順にたたくと、手だか足だか、ふらふらふらと刎はねる拍子に、何だか、けばだった処が口に見えて、尖とがつて、目皺めじわで笑つて、揃めつて騒ぐ。

「いえね、お前さん出来るわけがありますの。……その野宿で倒れた時き——当にして行つた仙台の人が、青森へ住替えたというので、取りつく島からまた流れて、なけなしの汽車のお代。盛岡とかいう処で、ふつと気がつくと、紙入がない、切符がなし。まさか、風体を視^みたつて箱仕事もしますまい。間抜けで落したと気がつくと、鉄道へ申し訳がありません。どうせ、恐入るものをさ、あとで気がつけば青森へ着いてからでも御沙汰^{おさた}は同じだものを、ちつとでも里数の少い方がお詫^{わび}がしいだろうでもって、馬鹿さが堪^{たま}らない。お前さん、あたふた、次の駅で下りましたがね。あわてついでに改札口だか、何だか、ふらふらと出ますとね、停車場も汽車も居なくなつて、町でしよう、もう日が、とつぷり暮れている。夜道の落人、ありがたい、網の目を抜けたと思いましたが、さあ、それでも追手が掛^かりそうで、恐い事——つかまつたつて、それだけだものを、大した御法でも背いたようでね。ええ、だもんだから、腹がすけば、ぼろ撥^{ばち}一挺^{ちよう}なくつても口三味線で門附けをしかねない図々しい度胸なのが、すたすたもので、町も、村も、ただ人氣のない処と遁^にげましたわ、知らぬ他国の奥州くんだり、東西も弁^わえない、心細い、噉^{なわて}道^{みち}。赤い月は、野末に一つ、あるけれど、もと末も分らない、雲を落した水のような畝^{うね}つた道を、とぼついで、堪らなくなつて——辻堂へ、路傍^{みちばた}の芒^{すすき}を分けても、手に露もかかりません。いきれ

の強い残暑のみぎり。

まあ、のめり込んだ御堂の中に、月にぼやつと菅笠ほどの影が出来て、大きな梟——また、あつちの森にも、こつちの林にも鳴いていました——その梟が、顚巻をしたような、それですよ。……祭つた怪しい、御本体は。——

この私だから度胸を据えて、禪が紅でないばかり、おかめが背負つたように、のめつていますと、（姉さん一緒においで。——）そういつて、堂のわきの茂りの中から、大方、在方の枝道を伝つて出たと見えます。うす青い縞の浴衣だか単衣だか、へこ帯のちよい結びで、頬被をしたのが、菅笠をね、被らずに、お前さん、背中へ掛けて、小さな風呂敷包みがその下にあるらしい……から脛の色の白いのが素足に草鞋ばきで、竹の杖を身軽について、すつと出て来てさ、お前さん。」

お妻は、踊の棒に手をかけたが、

「……実は、夜食をとりはぐつて、こつちも腹がすいて堪らない。堂にお供物の赤飯でもありはしないか、とそう思つて覗いて、お前を見たんだ、女じや食われない、食いもしようが可哀相だ、といつて笑うのが、まだ三十前、いいえ二十六七とも見える若い人。もう少し辛抱おしと、話しながら四五町、土橋を渡つて、榎と柳で暗くなると、家がありま

す。その取^と着^つらしいのの表戸を、きしきし、その若い人がやるけれど、開きますまい、あきません。その時き、お前さんちよつと捜^さして、藁^{わら}すべを一本見つけて。」

お妻は懷紙の坊さん（その言^{ことば}に従う）を一人、指につまんでいった。あと連は、掌^{たなそこ}の中に、こそこそ縮まる。

「それでね、あなた、そら、かなの、※形の、その字の上を、まるいように、ひよいと結んで、（お開け、お開け。）と言いますとね。」

信也氏はその顔^{みま}を瞻^みつて、黙然として聞いたというのである。

「——苦もなく開いたわ。お前さん、中は土間で、腰掛なんか、台があつて……一膳^{いちぜん}めし屋というのが、腰障子の字にも見えるほど、黒い森を、柳すかしに、青く、くぐつて、月あかりが、水で一漉^こし漉したように映ります。」

目も夜鳥ぐらい光ると見えて、すぐにね、あなた、井、小鉢、お櫃^{ひつ}を抱えて、——軒下へ、棚から落したように並べて、ね、蚊を払い（おお、飯はからだ。）（お菜漬^{はづけ}だけでも、）私もそこへ取着きましたが、きざみ昆布^{こぶ}、雁もどき、鰯^{にしん}、焼豆腐……皆、ぷんとむれ臭い。（よした、よした、大餛^{おおす}えに餛^{おす}えている。この温気^{うんき}だと、命仕事だ。）（あなたや……私はもう我慢が出来ない、お酒はどう。）……ねえ、お前さん。——

(酒はいけない。^{ひもじ}飢い時の飯粒は、天道もお目こぼし、姉さんが改札口で見つからなかったも同じだが、酒となると恐多い……)と素早いこと、さっさ、と片づけて、さ、もう一のし。

今度はね、大百姓……古い農家の玄関なし……土間の広い処へ入りましたがね、若い人の、ぴったり戸口へ寄った工合で、鍵のかかっていないことは分っています。こんな蒸暑さでも心得は心得で、縁も、戸口も、雨戸はぴったり閉っていました。そこは古い農家だけに、節穴だらけ、だから、覗くと、よく見えました。土間の向うの、^{おおき}大い炉のまわりに女が三人、男が六人、ごろんごろん寝ているのが。

若い人が、鼻紙を、と云って、私のを——そこから拾って来た、いくらもあります、農家だから。——藁^{さつき}すべで、前刻のような人形を九つ、お前さん、——そこで、その懷紙を、引裂いて、ちよつと包^{くる}めた分が、白くなるから、妙に三人の女に見えるじゃありませんか。

敷居際へ、——炉端のようなおなじ^{かつこう}恰好に、ごろんと順に寝かして、三度ばかり、上^{てのひら}から掌で俯向けに撫^なでたと思うと、もう楽なもの。

若い人が、ずかずか入って、寝ている人間の、裾^{すそ}だって枕^{まくら}許^{もと}だって、構やしません。

大まかに搔搜して、御飯、お香こう、お茶の土瓶まで……目刺を串ごと。旧の盆過ぎで、芋殻おがらがまだ沢山あるのを、へし折つて、まあ、戸を開放しのまま、敷居際、燃しつけて焼くんだもの、呆れました。（門火かじび、門火。）なんのと、呑気のんきなもので、（酒だと爛かんだが、こいつは死人しびとやき焼だ。このしろでなくて仕合せ、お給仕をしようか。）……がつがつ私が食べるうちに、若い女が、一人、炉端で、うむと胸も裾もあけはだけで起上りました。あなた、その時、火の誘つた夜風で、白い小さな人形がむくりと立ったじゃありませんか。ぽんと若い人が、その人形をもろに倒すと、むこうで、ばったり、今度は、うつむけにまた寝ました。

驚きましたわ。藁わらを捻ひねつたような人形でさえ、そんな業わざをするんだもの。……活きたものは、いざとなると、どんな事をしようも知れない、可おそろし恐いようね、ええ？……—もう行やつてる、寝込ねこみの御飯をさらって死人焼で目刺を——だって、ほほほ、まあ、そうね……

いえね、それについて、お前さん——あなたの前だけでも、お友だちの奥さん、京千代

さんは、半玉の時分、それはいけずの、いたずらでね、なかの妹（お民をいう）は、お人形をあつかえばって、屏風^{びやうぶ}を立てて、友染の搔卷^{かいまき}でおねんねさせたり、枕を二つならべたり、だったけれど、京千代と来たら、玉乗りに凝^こてるから、片端^{かたっぱし}から、姉様^{あねさま}も殿様も、紅い糸^{あか}や、太白で、ちよつとかがって、大小護謨毬^{ゴムまり}にのツけて、ジャズ騒ぎさ、——今でいえば。

主婦^{おかみ}に大目玉をくった事があるんだけど、弥生^{やよい}は里の雛遊^{ひなあそ}び……は常磐津^{ときわづ}か何かのもんくだつけ。お雛様を飾った時、……五人囃子^{ごばやし}を、毬にくツつけて、ぽんぽんぽん、ころん、くるくるなんだもの。

ところがね、真夜中さ。いいえ、二人はお座敷へ行っている……こっちはお茶がちだから、お節句だというのに、三人のいつもの部屋で寝ました処、枕許^{にぎや}が賑^{にぎ}かだから、船底を傾けて見ますとね、枕許を走ってる、長い黒髪の、白いきものが、球に乗って、……くりと廻^{まわ}ったり、うしろへ反^さったり、前へ^{すべ}たり、あら、大きな蝶が、いくつも、いくつも雪洞^{ぼんぼり}の火を^{くわ}啣^{くわ}えて踊る、ちらちら紅い袴^{はかま}が、と吃驚^{びっくり}すると、お囃子が雛壇で、目だの、鼓の手、笛の口が動くと思うと、ああ、遠い高い処、空の座敷で、イヤアと冴^さえて、太鼓の掛声、それが聞覚え^{ねえ}た、京千代ちい姐。

……ものの形をしたものは、こわいように、生きていますわね。

——やがてだわね、大きな樹の下なわての、隙すきから入口の、牛小屋うまやだが、厩うまやだかで、がたんがたん、騒さわしい音がしました。すつと立って若い人が、その方へ行きましたつけ。もう返った時は、ひっそり。苧おがら殻もえの燃もえ、藁わらの人形を揃そろえて、くべて、逆縁さかへながらと、土瓶どひんをしたんで、ざあ、ちゅうと皆消え、夜あらしが、颯さっと吹いて、月が真暗まっくらになって、しんとする。（行きましよう、行きましよう。）ぞつと私は凄すげくなつて、若い人の袖ひつぽを引張ひっぱつて、見はるかしの田畝でんそ道へ。……ほつとして、

（聞かして下さいまし、どんなお方）。

（私か。）

（あなた。）

（森の祠ひなの、金勢こんせい明神みょうじん。）

（……………）

（男の勢だ。）

（キヤア。）

話に聞いた振袖新造が——台のものあらしといって、大びけ過ぎに女郎屋の廊下へ出ましたと——狸に抱かれたような声を出して、夢中で小一町駆出しましたが、振向いても立って待つても、影も形も見えませんが、もう朝もやが白んで来ました。

それなの、あなた、ただいま行いました、小さなこの人形たちは。」

掌たなそこにのせた紙入形を凝じつとためて、

「人数にんずが足りないかしら、もつとも九ツ坊さんと来りやあ、恋のろいも呪のろいもしますからね。」

で、口を手つだわせて、手さきで扱しごいて、懷紙ふところがみを、蚕かいこを引出すように数を殖ふやすと、九つのあたまが揃って、黒い扉の鍵穴へ、手足がもじや、もじや、と動く。……信也氏は脇の下をすくめて、身ぶるいした。

「だ……」

がっかりして、

「めね……ちよつと……お待ちなさいよ。」

信也氏が口をきく間もなく、

「私じや術がきかないんだよ。こんな時だ。」

何をする。

風呂敷を解いた。見ると、絵筒である。お妻が蓋^{ふた}を抜きながら、

「雪おんなさん。」

「……………」

「あなたがいい、お婆けだから、出入りは自由だわ。」

すると早や絹地を、たちまち、水晶の五輪塔を、月影の梨の花が包んだような、扉に白く絵の姿を半ば映した。

「そりや、いけなかう、お妻さん。」

鶴の作品の扱い方をとがめたのではない、お妻の迷^{まよ}いをいたわって、悟そうとしたのである。

「いいえ、浅草の絵馬の馬も、草を食べたというじやありませんか。お京さんの旦那^{みづい}から、身^み鼻^び屑^いをするんじやあないけれど、あれだけ有名な方の絵が、このくらいな事が出来なくつちや。」

絵絹に、その面影が朦朧^{もうろう}と映ると見る間に、押した扉が、ツトおのずから、はずみにお妻の形を吸った。

「ああ、吃^{びっくり}驚、でもよかった。」

と、室^{へや}の中から、

「そら、御覧なさい、さあ、あなたも。」

どうも、あけ方が約束に背いたので、はじめから、鍵はかかっていなかったらしい。ただ信也氏が手を掛けて試みなかったのは、他に責^{せめ}を転じたのではない。空室^{あきま}らしい事は分っていたから。しかし、その、あえてする事をためらったのは、卑怯^{ひきよう}ともいえ、消極的な道徳、いや礼儀であつた。

つい信也氏も誘われた。

する事も、いう事も、かりそめながら、懷紙の九ツの坊さんで、力およばず、うつくし
いばけものの、雪おんな、雪女郎の、……手も袖もまだ見ない、膚^{はだ}であいた室^{へや}である。
一室^{ひとま}——ここへ入つてからの第二の……第三の妖^{よう}は………

昭和八（一九三三）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

開扉一妖帖

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>